最優秀賞

「あたりまえ」を「あたりまえ」に
出雲市立向陽中学校　3年　今川ちより

　私の祖父は障がい者です。生まれつき足が不自由で自力で歩くことが出来ません。車いすに乗る時、祖父はうめき声をあげて、とても苦しそうな顔をします。
　私が四歳の頃、祖父と買い物に行った時、祖父を見て笑う人がいました。同情するような顔の人やうるさそうにする人は何度も見てきましたが、笑う人は初めて見ました。私はとても悔しかったです。また、狭い所を通っていると「邪魔なんだけど。」と言われたり舌打ちをされたこともありました。とても辛かったです。
　しかし、祖父はとても堂々としていました。舌打ちされても、笑われても決して恥ずかしがりませんでした。「あんなことされて辛くないの？」と聞いたら、祖父は「もう慣れたよ。」と言いました。私は心無い事を言われるのも悲しいけど、それに慣れてしまう、慣れないといけないことが一番悲しかったです。私はあんな思いをするのはもう嫌だと思い、祖父と外出せず家で遊んでいました。
　ある日、祖父の家に行った時、ちょうど祖父が一人でコンビニに行くところでした。祖父が一人で行くのが心配で「私もついていく！」と言って一緒に行きました。その時、私は祖父にお金をもらって、私が買ってこようと思っていました。まだ五歳くらいだったので、商品に手が届かなかったり、商品が分からなかったらどうしようと、車の中でずっとドキドキしていました。コンビニに着いて降りようと思ったら、祖父が一回クラクションを鳴らしました。すると、店員さんが出てきて「降りられますか？」と聞いてくれました。祖父は首を横に振ると、買う物を書いた紙と財布を渡して「これを買ってきてください。」と慣れた様子で言いました。店員さんも慣れた様子で店に戻り、商品を持って出てきました。商品と財布を祖父に渡すと「ご利用ありがとうございました。」と笑顔で言ってくれました。私は、店員さんが一度も迷惑そうな顔をしなかったことが、とてもうれしかったです。
　小学校高学年になり、車いすを押せるようになると近くにいた人がドアを開けてくれたり、通路にある椅子をどけてくれるというたくさんの優しさを経験しました。あたりまえのように手伝ってくれることがとてもうれしかったです。
　しかしある日のことです。車いすで列に並んでいる時、「車いすの方、お先にどうぞ。」と言われました。その方は、善意で言ってくれたと思いますが、私は不快な気持ちになりました。車いすに乗っているというだけで、〔なにも出来ない人だから助けてあげなくちゃ〕と思われた気がしたからです。障がい者だから、何もできな

いわけではありません。

しかし、私も一度同じようなことをしてしまったことがあります。近所に、とても仲良しな耳の聞こえにくい友達がいます。補聴器をつけているので、ある程度は聞こえると言っていたので、普通に話していたら「早すぎて聞こえないからもう一回言って。」と言われました。私は聞こえにくいんだと思い「ごめんね。」と言ってゆっくりわかりやすいように単語のみ使って話し出しました。すると「赤ちゃんに話しているみたいな話し方は嫌だ。」と言われました。私ははっとしました。私にはどこかで障がい者は特別で私とは違うという意識があったのです。今の三年生の英語の教科書に国枝慎吾さんの言葉が載っています。「車いすでテニスをするなんてすごいことですねと時々言われます。それは私を心地悪くします。私たちはただ他の人と同じようにテニスをしているだけなのです。」たしかに、祖父も私たちと同じように移動していたし、友達も私たちと同じように話していました。障がい者も私たちと同じように生活しているだけです。生活の中で少しだけ苦手な事があったり、出来ない事があるだけなのです。人には得意不得意があり、それはあたりまえのことです。苦手な事があることは、全く恥ずかしいことではありません。あの時、祖父が堂々としていた意味が、今は分かります。

祖父は歩けない事が「あたりまえ」です。私は歩ける事が「あたりまえ」です。人によって「あたりまえ」は違います。出来ない事を悔やんだり恥ずかしがったり笑ったりするのではなく、皆が出来ない事を補い合って障がい者もその家族も誰もが堂々としていられる世の中になるべきだと思います。私は祖父と買い物に行っても堂々としていられます。出来ない事があるのは「あたりまえ」なのだから。